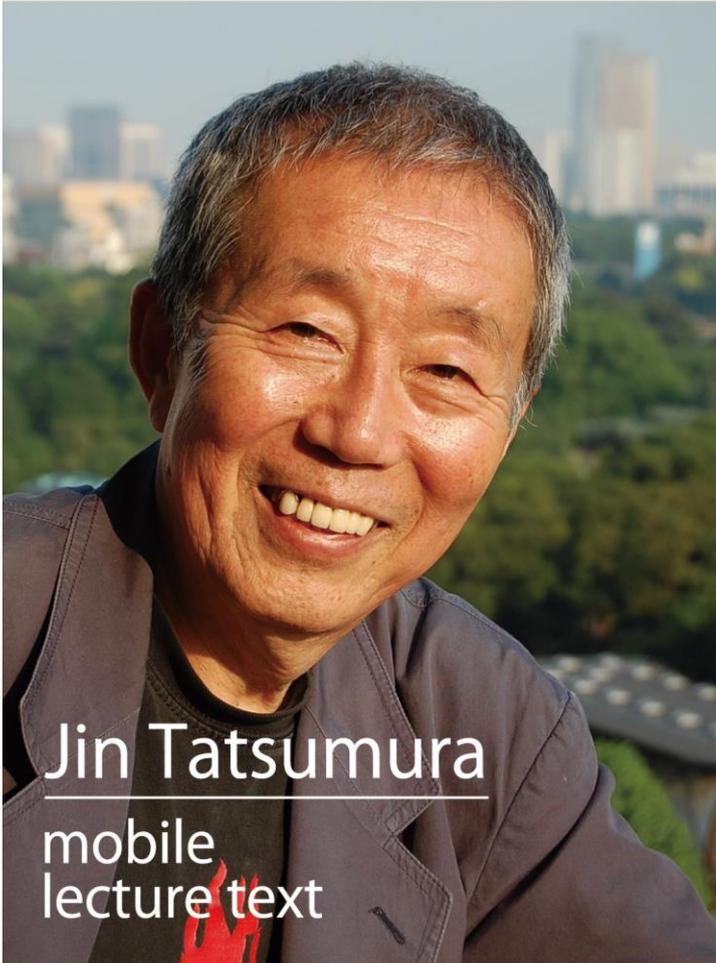


07

10分で読める
モバイル講演録



Jin Tatsumura

mobile
lecture text



Yukari Tatsumura

mobile
lecture text

すべての出来事は自分を見つめ直すためのメッセージ

龍村仁・龍村ゆかり

はじめに

あなたは人の話を聞く機会がありますか？

家族、職場、友人など限られた人間関係の中で生きて、彼らと同じ価値観から抜け出せずにいるのではないのでしょうか。

人の話を聞くことは、あなたの価値観を変えていきます。

価値観を変えることは、あなたの人生を変えていくということです。

同じ毎日の繰り返し、将来への不安、何となくやりきれない倦怠感。

すべてはあなたの「価値観」が生み出しています。

しかし、「人の話を聞く」といわれても、すぐにそれを実行できる人は多くありません。

気軽に講演会に足を運べるようになった昨今でも、「忙しくて講演を聴く時間なんてない」「行ってみただけど、時間のムダだった」という声もよく聞かれます。

そんな忙しいあなたに贈るのが「10分で読めるモバイル講演録」です。

「10分で読めるモバイル講演録」では、移動時間や待ち時間などの10分間で、著名人の講演のポイントを電子書籍で確認可能。もし、その内容に「価値がある」と判断すれば、実際の講演やインタビュー(約1時間分)を音声でじっくりと楽しむことができます。

セミナーに行くための時間や費用は不要。

その上、ポイントはすでに書籍となっているため、内容をメモする必要もなく、集中して講演を聴くことができます。

また、本講演は加藤登紀子、鳥越俊太郎、渡邊美樹ら著名人1000人以上のインタビュー経験を持つ、プロインタビュアー・早川洋平がナビゲートすることでテレビなどでは聞けない著名人たちの本音を聴くことができます。

すべての出来事を見つめ直すためのメッセージ／龍村仁・龍村ゆかり
(10分で読めるモバイル講演録第7巻)

目次

はじめに

第1章 私が伝えるビジョン

第2章 奇跡の出生シーン

第3章 誰もが感じる力を知っている

第4章 我々のテクノロジーを超えるガイア理論

今回のゲストは、ドキュメンタリー監督・龍村仁さんと「地球交響曲」プロデューサー・龍村ゆかりさんです。

前半は、龍村ゆかりさんからメディアエイター、プロデューサーというお仕事について、伝えたかったビジョン、目に見えないものにある真理、奇跡の出生シーンなどについてうかがいます。

後半は龍村仁さんから、NHK入局からドキュメンタリー監督になった経緯、「地球交響曲」が生まれたきっかけ、監督が考える直感やシンクロニシティの定義、映画に対してのこだわりなどをうかがってきました。

龍村ご夫妻が人生で培った価値観や思いを余すところなくお届けしたいと思います。

龍村ゆかり(たつむらゆかり)

映画プロデューサー修士課程修了。演劇を通して身体感覚が開くとともに演出論を学ぶ。86年に起きたスペースシャトル「チャレンジャー」の爆発事故に衝撃を受け、映像を通じて未来に希望や夢を伝えることを志し、映像制作の道へ。テレビ番組のディレクターとして数々のドキュメンタリーや情報番組を手がける。映画「地球交響曲」プロデューサー。2010年、「人々が母なるスピリッツを取りもどすことを願う」をテーマに非営利団体「いのちの環」を設立。世界の先住民族を代表したグランマザー国際会議、2010年日本開催メディアエイター。「佐藤初女、おむすびの祈り」などの出版プロデューサー。「スーザンオズボーン、ボイスセミナー」などのワークショップ、ヒーリングCDの企画・プロデューサーなど。シャーマニックな直感と、大地母性的なしなやかさを、あわせ持った、新しい世紀のプロデューサーを目指す。

龍村仁(たつむらじん)

1940年、兵庫県宝塚市生まれ。映画監督。63年、京都大学文学部美学科卒業後、NHK入局。74年、ATG映画『キャロル』を制作・監督したのを契機にNHKを退社。インディペンデント・ディレクターとしてドキュメンタリー、ドラマ、コマーシャルなど、数多くの作品を手がける。76年、『シルクロード幻視行』でギャラクシー賞、87年、『セゾングループ3分CM』でACC優秀賞受賞。また同年にはサイエンス・ファンタジー『宇宙船とカヌー』で、92年にはNTT DATASペシャル『宇宙からの贈りもの・ボイジャー航海者たち』でギャラクシー賞受賞。89年から制作を開始したライフ・ワーク『地球交響曲第一番』を92年に、『地球交響曲第二番』を95年に公開、翌年、京都府文化功労賞を受賞する。97年に『地球交響曲第三番』を公開。

2000年、(有)龍村仁事務所を設立。2001年に『地球交響曲第四番』、2004年に『地球交響曲第五番』、2007年には『地球交響曲第六番』を公開。同シリーズは全国規模の活発な自主上映会によって、のべ230万人にのぼる観客を動員、その数は今なおとどまることなく、かつてないロングランヒット作となっている。

映画『地球交響曲』プロデューサー 龍村ゆかりさん

第1章 私が伝えるビジョン

早川 みなさん、こんにちは。本日はゲストに『地球の祈り』(角川学芸出版)の著者であり、映画『地球交響曲』の監督・龍村仁さんと、プロデューサー・龍村ゆかりさんご夫妻をお迎えしています。

映画「地球交響曲」は、イギリスの生物物理学者であるジェームズ・ラブロック博士が唱える「ガイア理論」——地球はそれ自体が一つの生命体である——という考え方に基づいて、龍村仁監督によって制作されたオムニバスのドキュメンタリー映画シリーズです。アイルランドの幻想的な風景や、グリーンランドのフィヨルド、新潟の南魚沼市の里山といった美しい映像や音楽、そして学者や音楽家、宇宙飛行士などの珠玉の言葉の数々によって織り成される本作は、環境問題や人間の精神性に深い関心を寄せる人々のバイブル的存在となっています。

1992年の「第一番」公開から2010年公開の「第七番」まで草の根の自主上映を中心とした活動だけで、のべ240万人にのぼる観客を動員しました。その数はいまなおとどまることなく、かつてないロングランヒット作です。

今回、お二人にインタビュしようと思ったきっかけは、起業してから、僕自身が目に見えるものばかりを追い掛ける傾向がありました。それが、本作に触れたことで、目に見えないもの大切さを学び、人生が本当に変わったと思っています。充実感とは程遠く、心が渴いていた時期に本作を観て、「僕が求めていたものはこれだったんだ」と感動して救われました。

もっと「地球交響曲」や『地球の祈り』を広めたい。そんな気持ちから、お二人にゲストとして来ていただきました。

前半は龍村ゆかりさんからお話をうかがいたいと思います。まず、プロフィールにありますメディアエイターというのは、どのようなお仕事ですか？

龍村ゆかり(以下、ゆかり) 25年くらい前から、直感でこういう肩書きでお仕事をしたいと思っていました。メディアエイターとは、人や場所などをつなぐ、仲介者、媒介者という意味です。私はいつも、水路や通り道といった異なるもの同士を引き合わせるチャンネルのような存在でありたいと思って

います。

私は、目に見えない世界の方がリアルだと感じていました。できればある存在と、目に見えない世界をつなげていきたいと思っていました。コーディネートなどはいませんが、私はもっと目に見えない大いなる意志によって生かされているというベースの考え方を持っています。それなので、自分がつないでいくというより、つながるべきものたちの間に入るチャンネルでありたいです。職業として成立できていないのでずっと温めていましたが、やはり自分のミッションを生きようと思ったときに、メディアエイターという肩書きを名乗り始めるようになりました。

早川 メディアエイターという言葉はご自身が考えたのですか？

ゆかり そうです。辞書でメディアエイターと引きますと「媒介」と書かれています。私にはそれが一番しっくりきました。プロデューサーという肩書きは、いつもこそばゆいと思っていましたので(笑)。

早川 お話をうかがっていますと、映像ありきというよりも、ビジョンで見えたものを映像にしているといった感じがします。

ゆかり そうですね。このビジョンを、表に出していかなきゃと思い、映像を撮り始めました。

早川 そのビジョンとはどのようなものですか？

ゆかり 話すときとシンプルなのですが、人間が何のために生まれてきたのかを問いかけるストーリーです。ストーリーの中に現在、過去、未来があって、最後にチャレンジャーの7人が光になって宇宙から語りかけてきます。それは、核のエネルギーによって地球が終わろうとしているとき、人間は滅びる寸前に、本当の自分を探しに行き、答えを見つける。それが、何のために生まれ、何が大切なのかを伝えてくれるメッセージだったというストーリーです。

早川 そこから25年間、活動を続けているのですね。実際そのようなストーリーを作られたのですか？

ゆかり 最初は、直接そのストーリーをシナリオにして、映像にしたいと思っていました。しかし、当時はまだ23歳。社会に出たばかりで、その作り方が分かりませんでした。

それでテレビの世界に入りますが、テレビの世界では「目に見えないものは視聴率が取れない」という理由で、企画書が通りませんでした。その後、「視聴率を取るための仕事をやりたかったわけではない」という思いが強くなります。

技術的には、半年でディレクターになり、旅番組や情報番組などをたくさん作りました。こうして番組を作る技術は身に付けましたが、作りたいものはこれではない。ビジョンの方に向かわないと具合が悪くなり、どうしていいかわからず悩んでいました。

そこで、人とシエアすることを始めました。色々な方に「私、こんなビジョンがあるの」と話したら、みなさんさまざまな方を紹介して下さい、その中の1人が龍村仁でした。

早川 ガイアシンフォニー そこで仁さんと出会い、ご結婚されて、「地球交響曲」のプロデューサーとしてご活躍し始めたんですね。

ゆかり 彼のもとを訪ねて行き、先ほどお話ししたスペースシャトルのチャレンジャーの映像から始まるストーリーについて話しました。彼はひと通り話を聞いたあと、開口一番に「これは偶然じゃないね」と言いました。

当時、彼が制作していた「宇宙船とカヌー」というテレビ番組がありました。その最後が、チャレンジャーの爆発事故を科学者のフリーマン・ダイソンが聞くというシーンだったのです。それなので、最初は「チャレンジャー」だけのつながりでした(笑)。

ガイアシンフォニー そのとき、「地球交響曲 第一番」の撮影がちょうど終わる頃で、まだ公開前でしたが、その素材を見せてもらいました。それを見たとき「素晴らしい仕事をしている方だな」と思いました。

またそのときは、ボイジャーという惑星探査機のドキュメンタリー映画製作のプロジェクトが動き始める直前で。私がスペースシャトルの話をしたので、その番組作りと一緒にしませんか、と声をかけていただきました。テレビの仕事は辞めようと思っていたこともあり、それをきっかけにフリーランスとなり、一緒に番組作りに関わりました。

早川 ガイアシンフォニー 「地球交響曲」の統一テーマは「母なる星地球」ガイアは、それ自体が一つの大きな生命体であり、我々人類は、その大きな生命体の一部分として、他の全ての生命体と共に、今、ここに生かされている”ですが、この概念について、ゆかりさんは監督と出会う前から気付いていたのですか？

ゆかり 言葉として、生かされているという表現ではありませんでした。私たちはこの肉体だけがすべてではない、永遠の時間の中を生きている、命の巡りの輪の中で生かされているということは感じていました。その中で、人間は生きている間に何をしなければならぬのか、というメッセージを受け取ったのだと思います。

早川 ガイア 『地球の祈り』はご夫婦の共著ですが、本作だけですか？

ゆかり そうです。

早川 映像のプロであるお二人が、初めて共著で出版した意味や感じたことなどありましたら教えてください。

ゆかり 私たちは、ものづくりの際には、本当によく話し合いをします。しかし監督は、ものづくりに入ると一つのこと集中し始めることもあり、あるときから、私の言葉が届いていないと感じることがありました。

「第六番」の制作後に連載の機会をいただいたのですが、そのとき私は「自分の思いを監督に届けたい」と思い、「第六番」のエピソードをしたためました。その連載をまとめたものを監督が読み、「素晴らしい」と言い出して(笑)。私はやつと思いが通じたと思いい、出版しようという話になりました。

早川 出版ありきではなく、奥様からご主人へのメッセージだったので、すね。

ゆかり 出版社に相談したら「出版しましょう」と言ってくださって。それと同時に、監督のエッセイなど、未出版のものが色々ありましたので、まとめて出版することになりました。

早川 東日本大震災を通じて、プロデューサー、メディアエーターとして、感じたことや変化した価値観などありますか？

ゆかり 25年前に見ていたビジョンが、いよいよ現実になり始めたという感じ。私は石巻、陸前高田、福島などの被災地でボランティア活動もしましたが、それを通じて、私たちは自分の意識を大きく変えなくてはならないと思えました。その意識の変化を、ライフスタイルにも反映させる。そのことに尽きると思います。

エネルギー問題が大きな課題となっていますが、私は限界集落や過疎地の

活性化がこの問題を解決する鍵だと思っています。

日本の美しい里山が荒れ果て、人々が都市部に集中することによって暮らしに莫大なエネルギーが必要となりました。

しかし、本来、私たちは自然の中でたくさんの恵みをもたらして生きています。私たちの命は生きようとして生きていくのでなく、空気を吸うのも、食べることも、すべて自然からの恵みによって生かされています。そのことを一人一人が自覚したとき、一番美しい暮らしが始まると思います。

サンプル版はここまでです。続きは、アマゾンにてダウンロードしてお楽しみ下さい。

「すべての出来事は自分を見つめ直すためのメッセージ／龍村仁・龍村ゆかり（10分で読めるモバイル講演録第7巻）」

http://j.mp/10mobile_tatsumura_07

インタビューアー・プロフィール

早川洋平／はやかわ・ようへい
横浜生まれ。

中国新聞記者等を経てプロインタビュアーに。2008年には、インタビュー形式のインターネットラジオ（ポッドキャスト）番組「キクマガ」をスタート。加藤登紀子、鳥越俊太郎、渡邊美樹、茂木健一郎、石田衣良ら、130人以上のゲストが出演、年間150万ダウンロードを超える番組となっている。10、11年、横浜美術館「ラジオ美術館」、13年ユニクロCM「ステテコ&リラコ 風と暮らす篇」インタビュアー。

企業・機関・個人のメディアを創出するプロデューサーとしても活動。中核となるポッドキャスト配信サービスは、美術館、大学、病院、出版社、ラジオ局、ジャーナリスト、作家など、広く活用されている。「横浜美術館『ラジオ美術館』」「多摩大チャンネル」「鳥越俊太郎のニュースの職人チャンネル」「本田健の人生相談」「伊藤忠商事『THE 商社マン』」などプロデュース番組多数。

発行日 2013年12月30日第1版

著者 龍村仁・龍村ゆかり

発行者 早川洋平

執筆協力 三村 真佑美

制作 Textrage 編集部

〒244-0804

横浜市戸塚区前田町 516-1-B-110

MAIL : tr-inquiry@kiqtas.jp

URL : <http://kiqtas.jp/>

Copyright (C) 2013 KIQTAS All Rights Reserved.

本作品の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などすることは、固くお断りいたします。